

神なき自然における人間の頽落 —「人間」、「自然」二項関係言明の有効性と歴史性—

瀧 章 次

【要旨】

現代日本語「自然」、「人間」による、並びに現代印欧語各相当語による二項関係言明について、反省的局面においては、言語使用当事者間で一義的理解を共有することは体系的に困難であり、かつまた、言及される社会的集団成員間に相同性を仮定することは現実的に困難であるにもかかわらず、当該二項関係言明は必然的に無効とは言えず、集団的選択の有する社会的過程の諸条件を考量し当事者の自己意識における自己了解の前提を解明することにおいてはその有効性が残る。しかし、当該二項関係言明は歴史的に超越者を表す項を加えた三項関係言明の射影として成立してきた点で、二項関係言明の思考的枠組みは歴史的に相対的なものであり歴史を通じて汎通的な自明性を有するものではない。

キーワード：自然 nature 人間 神 集団的意思決定

1. はじめに

本論考は、「人間」、「自然」という代表的、総体的な一般概念を用いた言明の有効性について、その限界を問うものである¹。それと同時に、当該二項を用いてその関係性を陳述することが21世紀の現代でもあたかも当然の如く広く流通しているけれども²、その歴史性において、歴史的には「神」という第三項を加えた三項からなる説明図式を背後に持つ言明として了解されてきたものであって、二項からなる説明図式のもとに二項のみの言明へと変転してきたものであることを確認し、当該二項関係言明の思考の枠組みが決して普遍的自明性を有するものではないことを明らかにするものである。

2. 「人間」、「自然」二項からなる説明図式の有効性

冒頭においてあたかも歴史的な特定言語に依存しないかのように問題を提示した。それは、議論の冒頭において一般的な問題として了解されることを望んだからである。また本節の議

論の過程においても最終的に特定言語を超えていく可能性を示唆し得るとの立場からもその問題提示方式を選択した。

しかるに、それはある意味では結論の先取である。それゆえ、ここでは議論の正規の順序に戻る。したがって、議論を進めていくには、冒頭の問題提示の形式を一旦解消して、歴史的特定言語に密着して議論をすることから始めることとする。

「自然」という日本語は多義的に使用されている³。これは、印欧語の翻訳語として意識されるとき、翻訳語としての日本語「自然」の元の言葉、例えば、ギリシア語 φύσις (physis)、ラテン語 *natura*、フランス語 *nature*、ドイツ語 *Natur*、英語 *nature* 等においても同じである⁴。

したがって、日本語において、「人間」、「自然」の二項からなる言明は、使用においても、流通されている理解においても、一義的に定めることが困難である。

確かに、使用の現場でその都度、使用者、受容者間で、翻訳語であることを明示して、元の言語において了解することを約束として定めればまぎれもない指示対象を共通前提とすることができるかもしれない。しかし、日本語の 19 世紀後半明治期以来の歴史において、言語使用の現場で印欧語の翻訳語として、次第に意識されて来ているにしても、さらには、「原語の何某の云々の意味だ」と暗黙の共通理解を得ているとしても、当の元の言語に戻って当事者間で一義的理解を得ることは、形式的な表層の一致とはなり得ても、言語としての体系的構造的な意味においては、望めない。

それでも、言語からあいまいさを完全に排除することは不可能であることを鑑みれば、現実の言語使用の現場における理解において体系的厳密性を要求することは不当であると反問されよう。さしあたりは、日本語で「自然」と言えば、現代的には、海、河、山、いきもののように、論理学で言う概念の外延に基づく理解においては、言語使用者間では共通理解が広く成り立っているのではないかと、仮に、その場合、個々の外延のメンバーについても同様の共通理解が成り立つなら、「人間」、「自然」二項関係言明は、共通の理解はおおよそ得られるものではないかと、そして「おおよそ」以上は過度な要求ではないかと、このような反論は当然生ずる。

しかし、何を「自然」に分類し、何を「自然」に分類しないかが「おおよそ」決まっているのであれば確かに、反省に先立つ意識の了解においては十分言語使用者として現代 21 世紀日本語使用者は同型化されていると言ってよい。「犬である」か「犬でない」かは言語使用の現場で分類できていれば、生き物の日常の分類体系について、「おおよそ」以上に要求することは言語というものに対する無理解と言う事になろう。しかし、「人間」、「自然」の二項言明は反省的には（厳密には「犬」を含むいきものの分類体系同様）われわれの生の基盤的条件に関する共通理解に関わっているのではないかと。そうだとすれば、言語使用の現場における弁別に関して反省的に問うことは意味のないことではない。例えば、人間は「自然である」と述定できるのか否か、あるいは、感覚的事物はすべて「自然である」と述定できるのか否か、という問いは反省的にはわれわれの世界了解の基本に関して十分有効な問いではないか。

もちろん、「自然」単項はあいまいにしても、「自然」を含む二項関係の言明は、例えば、「自然を破壊する」というよく知られた関係性の言明は、具体的にその適用基準を公共的に取り決めることができるのではないかと、なおも反論され得る。

しかしこの場合においても、誰がこの基準を取り決めるのか。誰がその認証へと誘導するのか。仮に詰まる所は物理化学的に規定するとしよう。まさにそのような操作過程において当の関係性の公共的な基準を定めようとする態度そのものが、反省的には、なお問われるべき課題ではないか。

また別の基準設定として、公共的な社会的便益と社会的費用との計算においてその基準を誰もが参照できるとしよう。これによって「自然」という項の内包を問うことは棚上げできるかもしれない。しかしこのときまさに、われわれは、量化されるものとして理解する原理の中で問題を解消しようとしていることにはならないか。「自然」をこのような量化によって費用と便益において計算されるものにしてしまう態度こそは、歴史的に振り返っても、自明でも必然的でもなからう。

以上、日本語において、すでに翻訳語の氏素性が消されているときにおいてさえ、日本語「自然」について想定される共通理解の自明性は、すでに社会的相互認証を得ている場合があるにしても、反省的局面においては、堅固とは言い難い。

それでは、「人間」、「自然」の二項関係性言明は、そしてそれを含む言説は、何らかの反省的局面において有効な使用を得ることは不可能なことであろうか。

確かに、「人間」の項の側についても、反省的局面における共通理解の自明性は堅固とは言い難い。「民族」、「種族」などによる弁別の根拠はもはや自明でも妥当でもないにしても、それらが有してきた社会的排他性の歴史を鑑みれば、歴史を通して、いつの時代、どの場所においても、ひとびとが社会的排他性を超えたところで、帰属社会集団を越えてすべての社会集団にわたって同質となるような人間性なるものを了解していたかと問えば、そのような了解は極めて局所的にしか成り立たないことではないかと問えよう。

しかしながらそのような制約が「人間」の項の側にも付帯するとしても、なお当該二項関係性言明の使用を有効とする可能性はないであろうか。

確かに、「西欧近代の自然観」や「日本人の自然観」という主題の如く、歴史的地理的に特定の社会的集団が自己自身の自己意識においてそのような言明による自己了解を有するか、その可能性は問うてみることができる。また、実際にそのような言説は、西欧近代人という集団のみならず、「未開」から「文明」時代の諸集団について、行われてきた。

しかしこれらの言説の設定が、集団内の成員の相同性を暗黙の裡に前提してなされてきたことに対する批判は重ねられている。また、その言説がなされる社会的文脈そのものが相同性へと誤誘導する危険もすでに知られている⁵。このような批判を受け容れれば、当該二項関係性言明は、各項の多義性の問題が仮に一定程度解消されたとしても、暗黙の社会的前提が誤っているが故に、有効性は極めて疑わしい、そう結論づけるべきであろうか。

確かにここもお門違いの話だという反論はあり得る。思想的言説として、「人間」、「自然」二項関係言明というものは、それ自身だけを取り出して、その有効性を咎めるべきではなく、むしろ、総体的一般的概念の主題的、総括的、標語的利用とでもいうべきもので、そのもとに語られる言説全体から、とりわけそこに提示される個別具体的な証言の妥当性を判断し全体を評価すべきものであって、それこそ当該二項関係言明はノミナルではないにせよ代表的であるという立場もあろう⁶。

とはいえ、このような棚上げは本質的な解消にはならないであろう。むしろ、その言明そのものを単独においてもなお弁護し得る論拠を探究することのほうが望ましい。このような企図において、私は、社会集団の集団的選択と当該集団成員個々の選択内容に関する関与・参与の諸形態に着目することから、当該二項関係言明の有効性を探ることが可能と考える。

確かに、諸社会集団の集団的社会決定の決定過程の回路が歴史的、制度的に多様である。しかし、まさにそれだからこそ、その事を考量すれば、単層的で等質的な集団的決定へと短絡することを回避できる。

また、集団内の成員の集団的社会決定に関する関与の意識、責任の意識も多様である。同様に、このことを考量すれば、帰属成員間の関与意識、責任における相同性が存立していないとしても、制度的な代表関係、責任系統、顕在的・非顕在的諸種強制・抑圧構造の社会的過程の実態を規定することを通して、その条件の制約内において、当該二項関係言明を、ある社会集団についてなす可能性はなお残されていると考える。

すなわち、歴史的地理的な特定の社会集団の集合的自己了解のその自己意識に現れる明示的了解内容を条件づけている諸前提は何かを問う時に、そのような基盤的な下意識的了解構造を論ずる場において、なお当該二項関係言明を用いる可能性を否定できないと考える。

しかし、この立場は、そのような当該言明適用可能性とは、適用すべき地理的歴史的当事者の意識とは独立に、地理的歴史的に異なる時代にある適用者が、自身の分析方法に従って、自身の説明方式を適用するという、外生的な適用であって、適用される当事者の自己意識における自己了解とはかけ離れたものになるのではないかと反問され得る。

この反問の下分枝として二つの問いに以下答えたい。

第一に、翻訳語成立以前の地理的歴史的当事者は、例えば、現代の日本語に謂う「自然を破壊する」ということばでは自己意識において自己了解できなかったはずだ。したがって、現代の日本語で謂う「自然を破壊する」という言葉が指す事象は、自己了解においてはなかったはずだ。こう批判することができる。

確かに、現代の開発に伴う集団的生存基盤条件改変に等しき社会的事象は、日本では、第2次世界大戦後に現出する「自然を破壊する」という表現の社会的使用以前から、生起していた。またそれに類比する思考の枠組みを意識していた人間もいた⁷。私自身、日本にはそのような領域支配原理の相同性を通時的にたどる試みは、空想的には、狩猟採集社会における保存・貯蔵の始まりから、歴史学に従えば、10世紀前後に地方の治安統制のために中央から

派遣された武力集団が地方に駐屯定着して土着農村集団と交渉する過程から、たどることが可能であって、さらにその後の領域支配、近代化後の中央集権に至るまで連綿と継続しているように辿り得るという着想を持っている。

しかし、そのような類比性、類同性において理解することの歴史的理解における効用のゆえに、同じ事象として過去の諸事象をも相同化して束ねる試みとは別に、やはり、同時代の自己意識における自己理解の体系を解明する方法を、すなわち、総体的な意味で、いわば同時代的体系において当事者の視点に立って、内在的に解明する方法を、外発的尺度に基づく相同化の試みに先立つより基礎的な方法と考える。

第二に、人間の生物としての生存条件を分析して外界との相互関係を物理化学的に記述する近代科学の方法とどう異なるのかとも問われ得る。さらに、自然科学による物質レベルに還元して考察する方法が生み出す地理的歴史的汎通的洞察に比べれば、私の提案する方法は、極めて恣意的なものとなり得ないかとも問われ得る。

成程、近代自然科学程洗練されていなくとも、自己意識における了解を離れて、それらを含め人間の生活やそれを包括する世界そのものを成り立たせている条件を問う考え方は、古くからある。そのような世界の諸条件から現実を説明する方式も唯物論始め古くからある。そうした自然科学を含めた説明方式は、先に述べた、社会集団の集団的意思決定における自己了解を当事者の理解の前提から解明することとは明らかに異なるものである。したがって、地理的歴史的拘束を離れて物質的基盤を提示し得ても、当事者の自己了解を捨象していることは明らかであって、個別具体的な人間の自己意識に再適用することの短絡は権利のないことである。

3. 小 括

以上の議論を小括すると、「人間」、「自然」の二項を用いたその関係性を述べる言明ならびにそれをういた言説は、二つの問題を抱えている。一に、二項を表す言葉は、歴史的言語において多義的であって、体系的共通了解の基準根拠の選択に依然問題を解消できない。二に、当該二項関係言明がなされ得る場合にその言及される歴史的地理的社会集団について、その成員間相同性を安易に前提とすることの問題を解消することは容易ではない。しかしながら、当該集団の集団的意思決定過程の諸相諸局面を考量することによって、個別集団自己了解形成の前提を問う場面において、なお有効とする可能性は残されている。そして、その方法は、当時者の観点から内在的に問う方法を選択することにおいて、特定社会集団の自己了解と離れた外在的な疑似客観的な説明方式の導入と適用による解明とは異なる仕方で、なされ得る可能性は否定できない。それゆえ、こうした考察の集積は、もし可能であれば、一般化を可能とする余地は無ではない。

4. 「人間」、「自然」二項関係言明の歴史性

「人間」、「自然」二項関係言明は、日本語では、19 世紀後半の明治期において、西欧の書物を翻訳し理解する過程において生じてきた。「自然」という言葉は、古く中国から移入された言葉として、移入元の仏教、儒教、老荘思想のみならず、日本思想の自己表現においても、形容詞・副詞として用いられ、名詞として用いられるときにもその様態の意味であった⁸。したがって、「自然」をいわば、名詞的にその該当する集合の外延において理解し使用することは、蘭学者の翻訳における原語理解に起源を有しつつ⁹、明確には、その後の明治期における翻訳を通して確立されたものである¹⁰。明治期・大正期にあっても、翻訳思想や翻訳そのものの距離によって、なお形容詞・副詞という従来の用法が広くなされていた。名詞としての用法が共通了解として言語使用者に広まるのは第2次世界大戦後のことである¹¹。

それに対して、西欧においては、英語の *nature* ほかに他言語の相当語は、日本語の翻訳語における名詞的用法同様、宇宙、世界、万物といった事物の総体としての外延的用法に留まらない。日本語で「性質」、「本質」と訳される場合が典型である通り、内包的にも用いられて来た。むしろこちらの用法が歴史的には 19 世紀以前は圧倒している¹²。そして、単に個々の事物の本性、本質の意味から、さらには万物、宇宙の本質、原理というより抽象的な段階にまで広がる¹³。なおこれは日本語で「物理」、「窮理」などと訳されてきたことにも反映されている。

そして当該同一語 *nature* ほかのことばの持つ二義は、キリスト教教義のもと、神の世界創造に基づいて、外延的には被造物として理解され、内包的には、神が事物に創造時に与えた本質、さらには、創造後の世界において内存在する霊としての神そのものや神の力を意味する。この図式にあって、さらに、人は神の似像として創造されている意味において特殊な位置を与えられる。同時に、内包的な意味での創造されたままの存在様式（人間本性）においては（自己保存的生存欲求充足を追求することにおいては¹⁴）、否定されるべき様態（「罪」を負う様態）であり、そのままのありかた（*natura*）から、神の恵みによって、高次の段階（「信仰」（*fides*）の様態に、飛躍的に引き上げられなければならないとされる。また、存在様態の飛躍的移行は、イエス・キリストの十字架上の死による贖いと復活の教義とも結びつき、パウロによれば、イエス・キリストの十字架とともに「死」に、イエス・キリストの復活とともに「生まれ変わる」存在様態変化とされる¹⁵。この飛躍的移行は自然法の支配する自然状態から社会・国家共同体への移行においても集団的に類比され考えられていた¹⁶。以上、このキリスト教教義の図式において、個人であれ集団であれ、「征服」されるべき「自然」とは人間本性であった¹⁷。

こうしたキリスト教的背景の前景をなす「自然」、「人間」二項関係言明について、日本においては、明治期から現代に至る翻訳を通して西欧思想を理解して自分のものとして来た人々たちにおいては、これら二項の関係を表述することが、第三項を含む図式を暗黙に了解して

なされている場合もあったと推定できる¹⁸。

しかしながら、翻訳語の流通において、仮に言語使用者が元の文脈における第三項を含む関係言明からの射影を意識していたとしても、その射影関係を付加して提示しない限りは、その言明を受け容れる立場にあっては、暗黙の共通理解がない限り、単なる二項関係言明として了解されるのは当然のことである。

三項関係性が二項関係性に単純化される事態が進む背景には西欧の事情もある。西欧においても、同時代的には第三項を含む説明方式から第三項を排除する言説や、第三項を背景化する言説が広がっていた¹⁹。それゆえに、日本の翻訳文化においても、二項からなる言明において流通することになることは趨勢であった。

また日本では翻訳の現場において、徳川時代の禁制の影響もあり、キリスト教教義を空洞化することも意識してなされた²⁰。例えば、中国における宣教師の翻訳活動の影響からも²¹、「神」の「天」への転化により、西欧近代の土着的転変が生じたと考えられる²²。超越性の内実において、無生成因性（「無為」、「自_レ然_ル」）、超聴覚的言語的経絡（「天命」）、さらには、物在を通した人格的触発の契機でさえ（「草木国土悉皆成仏」）、その受容基盤は有していても²³、二人称的交わりの現実性において外来固有名には閉ざそうとしていたということではないか。

そして、第2次世界大戦後、すでに戦前からのことではあったけれども²⁴、国立公園の思想が同じく外生的に移入されることを通して²⁵、「自然保護」なる二項関係の思想が広まり、二項関係で物語ることが現代に至っている。

21世紀の現在この状況を振り返るとき、このような二項関係による言明の使用や理解を押し止めることは容易にできない。先に述べた科学的物質レベルへの還元方式への傾きと協働していることも容易に理解のできることである。

しかしながら、人間生存基盤条件の根本的危機が諸方面で20世紀後半において議論されたときに、反省的には、問題の二項関係言明が第三項を含む三項関係言明の射影として派生してきたものであることは改めて指摘されていたことである²⁶。また、西欧近代をこのような二項関係の言明で言述する趨勢に対して、科学史研究自体の進展において、三項関係が一挙に完璧に二項関係に転じたかのように論じてきた近代科学史記述の総括を再検討し、歴史的具相における錯綜の現実を解明してきている²⁷。例えば、近代科学技術の進展がもたらす「自然の征服」は「神の栄光を顕わす」使命として当事者において意識されるということもあり得たのである²⁸。こうした歴史の経緯を顧みるとき、現代21世紀を生きるわれわれの意識における二項関係言明による前反省的了解の枠組みを、そのまま自明視することは危ういと言える。

5. むすび

もし先人の反省に立ち返って、そこから教訓を探るとするならば、われわれ人間集団の集団的社会決定の現実的影響を将来にわたって問い直すときに、当該二項関係言明を可能とする場として、本論前半に述べたように、その社会的決定の前提となっている自己了解をその根底から問い直す作業をだれもが引き受けていくことが求められよう。そして現代もなお従来の思考法からは問題の解決策が見えないとすれば、それはわれわれの思考の枠組みが鉄鎖となり見直す端緒すら見ようとしなくなっているということであろう。そうだとすれば、われわれの自己了解の基盤的構造において当該二項関係言明をその理解と社会的関与の現場から改めて俎上に載せる一步をひとりひとり試みるものが課せられている。

【補注】

1. 例えば、和辻哲郎（1943（初版 1935））137:「次にモンスーンの忍従性もまた日本の人間において特殊な形態を取っている。…だから日本の人間は、自然を征服しようともせずまた自然に敵対しようともしなかったにかかわらず、なお戦闘的反抗的な気分において、持久的ならぬあきらかに達したのである。」、高楠順次郎（1935）3:「またヨーロッパの人の考えから申しますと、文明というものは人間が自然を征服することから起こる、人間がだんだんに自然の範囲を征服して行つてその上に文明が起こるのであるが、インド人から考えるとこれは大まちがいで、自然を征服するということは生存競争の範囲を拡げたということだけの話で、地上にあるすべての強き動物をことごとく人間が征服し得ればそれは人間の世界だけは広がるだろうが、それは決してほんとうの文明ではない、ほんとうの文明は自然を征服するのではなくて自然に同化するというのである、そういうのでありますからヨーロッパでもって文明の起原として考えられているものはインド人はことごとく否認する、否認するということは敢て理屈を拵えているのじゃなくて、自然にそう考えているというより他にないのである、そういう風の調子でまるで考えが違っているのであります。」、宇井純（1972）6-7:「しかし、昭和にはいつの戦争経済は、こうした進歩をいっさい押し流してしまい、戦争のための生産第一の思想は、各地に新しい公害をばらまく結果となった。敗戦による政治体制の変化も、生産第一の思想を再検討する機会とはならず、かえって復興のためにすべての自然資源を勝手に利用する安直な考え方を普及させた。こうして、公害に対する国民の考えかた、ことに公害を発生する企業家の思想は、戦前から戦後を通じて、むしろ退歩の一途をたどったのであった。／このような状態から出発した高度経済成長が、実質的には公害の高度経済成長になったのはむしろ当然であろう。自然と人間を自分の都合のよいところだけ利用し、あとをきりすててかえりみない思想は必然的に公害を生む。…」。
2. 「…産業革命とコインの表裏の関係にあるモダニズムの正体とは、自然との共生から一転、その支

配へと向かおうとする、ひどく人間中心的な思潮だった。…」(「岡本太郎の巨視的な美」『東京新聞』2015年6月12日、夕刊、p.7)。

3. 柳父章 (1977) 31-50、id. (1982) 125-148、伊藤俊太郎 (1985) 135-146、id. (1988) s.v.「自然」、id. (1998) s.v.「自然」、id. (1999)。
4. Pseud-Zonarus [A.D. 13C], *Lexicon*, s.v. φύσις, Boyle (1685), Mill (1850).
5. 井上 (1996)、杉本 (1997)。
6. 例えば、Buruckhardt (1860) 第4章タイトルのルネッサンス評価「人間と世界の発見」‘Die Entdeckung der Welt und des Menschen’。
7. 三浦浄心 (茂正) (ca. 1615)「南海を埋め江戸町立て給ふ事」『慶長見聞集』巻7、大鳥圭介 (1874 作 (1879 出版)) [i]、約悲奚般【Joseph Haven】著 西周訳 (明治8年 (1875年))『心理学』12-13 (Haven (1876) 21)
8. 柳父章 (1977)。そのほか、廣瀬元恭譯 (嘉永7年 1854年)「総論」、『理学提要』第1巻、1「凡物散在覆載之間觸覚我五官者謂之納都烏爾萬有之義也万物成体與性用之本原謂之癡亜加納都烏爾由是覈究其体性之理謂之納都烏爾裙垵窮物理學之義也」、飛田良文、李漢燮編 (2001) ヘボン著『和英語林集成—初版・再版・三版対照総索引』, s.v. ‘nature’: 初版 (1867): Nature, Sho, shitsz, umaretszki, seishitsz, sho-ai, sei; 再版 (1872): Nature, n. Sho, shitsu, umaretsuki, seishitsu, sho-ai, sei, mochi-maye; 3版 (1886): Nature, n. Sho, shitsu, umaretsuki, seishitsu, sho-ai, sei, mochimae; banyu, uchu, tenri. (1867年、1872年の時点までは、nature は「性質」の意味にあたる日本語、すなわち存在様態、存在様式概念であったのに、ヘボンは、明治19年、1886年時点では、存在物の総体の意味としての「万有」と「宇宙」を加えるほか、創造論的な、存在原理たる「天理」を加える)、高橋五郎 (1878)『漢英対照いろは辞典』s.v.「ばんぶつ」:「萬物, よろづのもの, 萬象 All things, all nature.」、s.v.「ほんしやう」:「本性, まことのころね; 本体 Real nature.」、s.v.「ほんぜん (形)」:「本然, 自然, 天然 Natural.」、s.v.「りんせん」:「林泉, はやしいずみ (山水の景色をいふ); たま庭苑 View of nature, landscape, a garden.」、s.v.「おのづから (副)」:「自, 自然, 天然, ひとりでに Naturally; of itself.」、s.v.「たち (名)」:「質, うまれつき The nature, or quality.」【類似項多数あり】、s.v.「たんしょう」:「探勝 (山水の景色を探り遊び歩くを謂ふ) Going about enjoying the beauty of nature.」、s.v.「むい」:「無為, することなき, 寂滅 (佛教の意); 又おのづから, 自然 (天下の治まる事等に云ふ) Doing nothing, absolute quietness; also natural condition.」、s.v.「ふうげつ」:「風月, 雪花 (春風秋月の光景を謂ふ) Nature, natural views」、s.v.「さんすみ」:「山水, やまみづ (天然の景色) Nature, natural view.」、s.v.「じねん (形副)」:「自然 (しぜん), おのづから Natural; naturally.」、s.v.「しぜん (形副)」:「自然, おのづから; おのづと Natural, naturally.」、s.v.「しんらまんざう」:「森羅萬象 (天地の萬物を云ふ) All things, all nature.」、s.v.「せい (名)」:「性, たち, さが, 性質 Nature, natural temper.」。そのほか辞書の記述における日本語「自然」については以下の辞書の「自然」の項を見よ (大槻 (1889)、落合 (1904)、上田、松井 (1915)、落合 (1922)、『大辞典』(1936)、大槻 (1956)、松村明 (1988)、同監修 (1995)、金田一、池田 (1988)、『日本国語大辞典』第2版 (2001)、新村 (2008))。漢語「自然」について

は、以下の辞書の「自然」の項を見よ（陸ほか編（1915）、羅編（1986-1994）、諸橋（1988））。仏教における「自然」については、中村（2001）の「自然」の項を見よ。また 16 世紀-17 世紀に日本に來たイエズス会の宣教師たちは、キリスト教教義における *natura*（ラテン語）を、彼らが学び習熟した日本語における「自然」（*shizen*, *jinen*）に置き換えることはせず、音訳語「なつうら」を用いた。この点、言語的思想的体系的相違を理解していたと想定される（*Companhia de Iesv* (1603) s.v. ‘Xijen’、‘Iinen’、‘Tennen’、‘Tenxei’、‘Vonozzucara’、‘Xo’、‘Xotocu’、‘Ten’、‘Tento’、Rodriguez (1630) s.v. ‘Xijen’、Collado (1632) s.v. ‘Deus’、‘Ratio’、‘Natural’、‘Naturaliter’、Pagés (1868) s.v. ‘Chijen’、‘Jinen’、*Dictionarivm Latino Lvsitanicvm, ac Iaponicvm ex Amrosiicale*. Amacvsa, 1595, s.v. ‘natuta’、‘physica’、‘physice’、‘physicus’、‘physis’、‘hypostasis’、ハビアン『妙貞問答』中巻 126-7、下巻 146-7、178-179、『どちらいな - きりしたん』（ヴァチカン図書館蔵、1591 年版）69-70、古賀（2000）s.v. 「ナツウラ」。

9. 稲村ら（1796）『波留麻和解』、s.v. ‘natuur’: ‘natuur 自然/nature dezen, zijn 助詞 行ク、為ス、碌/natuur 神力にて造る造物者、生物、人為ニ非ズ/natuur 造化の神、神、萬物ヲ生ズル神/natuur 性質/natuur, stand, staat, gesteld 形状 自然ニデキソロヒタツテ居/natuur 自然の理 自ラ知レテアル事/natuur 欲シ好/natuur 自然ノ好欲/natuur 自然ノ好欲/natuur 損ズル 枯ルル 形ガナクナル’、吉雄ほか『道訳法児馬』s.v. ‘Natuur’: ‘natuur, z. r. und u. het geschapene heel al 造物者ニ作ラレタル物 … De gantsch natuur is een drorlugtig bewijs van gods deigden.造物者ニ作ラレタル万物ハ天ノ徳ヲ示ス 著キ證拠ナリ…’、廣田憲寛（1857）『増補改正譯鍵』s.v. ‘Natuur’: 「Natuur. s. f. 自然。性質。形状。造化。好欲。本理。損枯。」、『暗厄利亜語林大成』（1814）s.v. ‘natural philosophy’: 「理学 窮理学」、s.v. ‘Nature’: 「天理 自然」、堀達之助編（1862）『英和对訳袖珍辞書』s.v. ‘nature’: 「天地萬物。宇宙（ウチウ）。本體（タイ）。造物者（ゾウブツシャ）。性質（セイシツ）。天地自然ノ道理（ドウリ）。品種（シナジナ）」。
10. 印欧語の言語を外延的に翻訳する例については、約瑟奚般【Joseph Haven】著、西周訳（明治 8 年（1875 年））『心理学』1, 2, 14。印欧語の翻訳語として外延的に理解し用いる例は、波多野（1901）14、69-70、岩村（1905）92。
11. 久米邦武（1878）『特命全權大使米欧回覧実記』において、非人為的な感覚の対象について諸所で記述、描写を行っているけれども、その前後に、非人為的感覚対象の総体あるいはその対象領域表す日本語としての「自然」は使用されていない。山、河、野などの地形について記述しているけれども、その総称として「自然」という言葉を用いてはいない。「自然」は存在者の総体や領域ではなく、非人為としての存在様式である（久米（1878）第 1 編、15-6）。イザベラ・バード（1831-1904）は、19 世紀後半に日本を歩いて観察した英語を母語とするひととして、*Unbeaten Tracks in Japan* (1881)において、日本の風景について、存在者の総体や存在領域を‘nature’と言い表すことを書き記していた（Bird（1888）57）。ただし、牧師の娘としてキリスト教的背景において見ていたと推定される（Bird（1894）26）。ヘボンらによる漢文を知らぬ一般人に向けられた『新約全書』（明治 14 年（1881 年））の日本語訳においては、コリントの信徒への手紙 11:14 において、原文、οὐδὲ ἡ φύσις

αὐτὴ διδάσκει ὑμᾶς ὅτι …、欽定訳 ‘Doth not even nature itself teach you, …’とあるところ、漢訳「豈不知…天然の理…」(A Committee of Peking Missionaries (1872))と同じく「爾曹【なんじら】自然に知るにあらずや…」と、名詞として訳さない。小崎弘道は英米の神学、ドイツの神学にも一定程度通じ、また、西欧の近代哲学についても概略通じていたと言える。それゆえ、稲村三伯ら(1796)『波留麻和解』の *Natuur* の訳語としての数々を西欧の思想、神学を語るうえで駆使していながら、自ら「自然」、「天然」を用いるときは、存在者の総体や包括者の意味では用いず、存在の様態として、おのずからなる有様、必然性などの意味で用いていた(小崎(1889) 427-8)。そのほか、日本語における「自然」という言葉の明治・大正・昭和における変移は『朝日新聞』の諸例からも証拠づけることができる(副詞・形容詞としての「自然」(以下略号:「東」:『東京朝日新聞』、「大」:『大阪朝日新聞』、「明治」: M、「大正」: T、「昭和」: S、日付は「3月12日」は「0312」のように表す、「朝刊」:「朝」、「夕刊」:「夕」、丸カッコ内は西暦、記号列末数字は所載頁):「大阪府録事」大 M12(1879)0223 朝 1、「雑報」大 M12(1879)0717 朝 1、「雑報」大 M12(1879)1105 朝 2、「雑報」大 M13(1880)0305 朝 1、「雑報」大 M13(1880)0312 朝 2、「東京寄書」大 M13(1880)0504、「雑報」大 M13(1880)0509 朝 1、「こころづくし 第十九」東 M22(1889)0728 朝 3、「政社非政社両派合併」東 M22(1889)1012 朝 1、「回顧録 第十一」東 M33(1900)0109 朝 2、「紀元節参列者心得」東 M37(1900)0127 朝 1、「製茶検査の苦情」東 M33(1900)0414 朝 2、「青島前民政長官」東 T4(1915)0206 朝 4、「町村農会長会議」東大 4(1915)0320 朝 3、「楠瀬前陸相休職」東 T4(1915)0329 朝 3、オキシヘーラー広告 東 T14(1925)0102 朝 1、「自然科学者の連合機関成る」東 T14(1925)0111 夕 2、自然療養社広告「肺患に悩める友へ」東 T14(1925)0118 朝 10、「心なき登山家に荒らされる山や湖」東 S2(1927)0707 夕 2、「廣祐丸の船火事」東 S10(1935)0131 夕 2、「歳費の値上げに…妙案「申し訳減税」」東 S10(1935)0328 朝 11、「満州石油問題自然に解消か」東 S10(1935)0216 夕 8、「女性相談」東 S10(1935)0219 朝 5、「市に面目ありや」東 S10(1935)0303 夕 3、見出し「日・独外交関係は自然消滅」東 S20(1945)0609 朝 1、「水道 年末までご辛抱」S20(1945)0908 朝 2)、名詞にして印欧語の翻訳語、「伊国全権公使の演説(続)」T23(1890)0509 朝 1、「无聲会の絵画展覧会」東 M33(1900)0305 朝 2、「漫言漫筆(九)」東 M33(1900)0316 朝 2、「古美術と新美術」瀧文科大学教授談 東 T4(1915)0105 朝 6、「世界的たらんとする日本文藝の現状(2)」東 T4(1915)0107 朝 6、けいしらう「デモクラシー」「南の椽にて(六)」東 T4(1915)0218 朝 6、「白頭は連日大吹雪／一行山頂で苦闘」東 S10(1935)0112 朝 3、「海外単信 希臘聖山保護法」東 S13(1938)1210 朝 7、文相談「思考力を昂揚」S20(1945) 0819 朝 1、「南方自然科学研究所も改組」S20(1945)1126 朝 2、「自然美を損なうな／日本は観光国で生きよ」S21(1946)0917 朝 2、「小河内の自然保護を申入れ／日本自然保護協会が」S33(1958)0409 朝 10)【戦後「自然保護」初出】、社説「自然を大切に」S37(1962)0807 朝 2、社説「自然破壊は妨げないか」S40(1965)0129 朝 2。

12. *Cobbett's Parliamentary History of England* 全 36 巻 (1806-1816, London) は 1066 年から 1803 年までの議会記録を集めたものである。ただし、粗密は激しく、第 1 巻 (London, 1806) は 1066 年からジェームズ 1 世の死ぬ年の 1625 年までの記録であり、古いものは間接的な記録で言い換えているものである。従って語彙等も記録時のものである可能性は残る。そのような制限の下、第 1 巻では、‘nature’

は 184 例現れる。そのうちほとんどは「本性」、「本質」の用法である。他方、「本性」、「本質」以外の、原因や原理の意味をもつ ‘nature’ の用法は、‘by nature’ という句、9 例 (coll. 277, 351, 979, 994 bis, 1085, 1088, 1375)、ほか 29 例ある。なお対照例として、事物の総体または、事物の存在領域を表すことばとして、‘world’ は、137 例ある。なお ‘universe’ は 1 例もない。また、1801 年-1810 年の 10 年間の英国議会議事録 (Hansard) 中の出現数約 1000 例中、「本質」、「性質」以外の用例は 4 例である。「存在原理」、「存在原因」の用法が 2 例、「nature の法」という国家、市民社会成立以前の人間本性の状態を示す慣用法が 1 例、存在領域を表す用法が 1 例である。

13. 調べた限りでは、印刷時代の辞書において、Altieri の英伊辞典を除いて、外延的用法としての事物の総体の意味を記述することは 19 世紀になるまでない。Du Cange (1688) s.v. φύσις, Stephanus (1572) s.v. φύσις, Altieri (1727) s.v. ‘Nature’, *Conversations Lexicon* (1815), s.v. ‘Natur’, Larousse (1863) s.v. ‘nature’, Webster (1864) s.v. ‘nature’, Craigie (1907) (Murray, J.A.H., *A New English Dictionary*) s.v. ‘nature’, Liddell and Scott (1897) s.v. φύσις, Liddell, Scott and Jones (1996) s.v. φύσις, Glare (2012) s.v. ‘natura’.
14. 「第二十 にんげんのはかなき事をしあんする事」『こんてむつむん地』(1610, 京都)、新村、柊校注 (1993) 234-5.
15. ローマの信徒への手紙 6:1-14、コリントの信徒への手紙 4:7-15, 5:14-21、エフェソの信徒への手紙 2:1-10、コロサイの信徒への手紙 2:11-14 (cf. テモテへの手紙 2:2:11-13. そのほか三項図式としての明確な理解の例は、Augustinus, *De trinitate*, c.1, n. 1, Eriugena, *Periphyseon*, I. 9, Petrus Lombardus, *Sententiae*, I.3.1, I.3.6, Averrois Cordubensis, *In Libros Physicorum Aristotelis*, II.1.11 (25^f), Bonaventura, *Dubia* II, *Dubia circa litteram magistri, distinctio VIII, articulus II, quaestio III*, id., *Christus unus omnium magister*, 16, id., *Collationes de donis spiritus sancti*, 1.11.36, id., *Collationes de donis spiritus sancti*, 4.2.175, Thomas Aquinas, *Summa Theologica*, 1.2. Q5. A6. co., 1.2. Q112. A1. arg. 1, 1. Q94. A3, 1. Q95. A1. arg. 6, 1. Q92. A1. ad. 1, Erasmus (1516) *Paraclesis* (‘Quid autem aliud est Christi philosophia, quam ipse renascentiam uocat, quam instauratione bene conditae naturae?’), Luther (1520a) 4, 23, id. (1520b) 25, Calvin (1559) I, xvi, 7, id. (1887), col. 41, dd *Psalmos*, 96:10. 「第六 けれど、ならびにひいですのあるちいごの事」『どちりいな - きりしたん』(海老沢ほか (1970) 36, 40)、 「第廿二 じゆいぞとて御きうめいととがにあたるくるしみの事」『こんてむつむん地』(1610, 京都)、新村、柊校注 (1993) 243-5, Halma, (1729), s.v. ‘Natuur, ‘t Geschapene heelal’, ‘Natuur, weezen’, ‘Natuur, God, de Schepper van ‘t heelal’, ‘Natuur, de ingeschape reden of kennis’, ‘Natuur, verdorventheid, bedorvestand」、吉雄ほか『道訳法児馬』, s.v. ‘Natuur’, ibid., s.v. ‘natuurboek’, Schelling (1803) 3, 49, 61, 64, 78-79.
16. Hobbes (1651), *Leviathan*, Introduction; II. 18, 26, 30-31, 42; Locke (1690), *Two Treatises of Government*, II. 3, 123; Spinoza (1670), *Tractatus theologico-politicus*, Hamburgi, 1670. Cap. 16, 179; 185; Rousseau (1755) lx-lxii; id. (1762) livre 1, chap. viii; Smith (1776) IV, 2, 9 (‘an invisible hand’). (cf. Weber (1905) 73)
17. E.g. Thomas à Kempis (1418), *Imitatio Christi*, III.55.2: ‘Opus est gratia tua et magna gratia, ut vincatur natura ad malum semper prona ab adolescentia sua.’; Thomas Aquinas, *Expositio in Matthaeum*, *Catena*

aurea in quattuor evangelia, Catena in Mt. cap. 22 I. 3: '[Ioannes Chrysostomus:...] quoniam sicut omnes actus carnales, opera sunt animalium, praecipue tamen actus libidinis: sic omnes virtutes sunt res angelicae, praecipue tamen castitas, per quam vincitur natura virtutibus.'

18. 波多野 (1949 (1901 初出) 128: 「さて神の生命にして自然界に限なく通へるならば、自然の秘奥に探入り神力をわがものとなしたらむには自然を支配し秘術を行ふの妙力を得べし。かくて神智學は一転して秘術 (Magie) とはなりぬ。アグリッパ (Agrippa von Nettesheim 一四八七-一五三五) は是の傾向を示せり。」、同書、130: 「スコラ哲学は自然を超自然的なる神によりて説明せり。哲学が神学と分離してより自然は其自身の原理を以て (Juxta propria principia—テレーシウスの用いたる語) 説明せらるべき者とはなれり。其説明を試みたるは伊太利の自然哲学なり。万有神教はその特徴なり。自然はわが上に神を戴かざるに至つて自ら神となりたるなり。」、同書、134、フランシス・ベーコンについて「されば吾等は自然に従順なるに由て自然を使役するを得るなり (Natura parendo vincitur)。自然力を使役して偉大なる事業を成遂げむとのルネッサンス時代の大志望は空漠たる秘術的思想を棄てて着実なる科学研究の途に就くに及んで始めて充たさるべしということは今や茲に意識せらるるに至りしなり。」、同書、152、「神は万物の内在的原因 (causa immanens) にして超越的原因 (causa transiens) に非ず。今万物を自然と名づけむか、其自然を在らしめ又然あらしむる原因の方より見たるが即ち神なり。有限物の世界を所産的自然 (natura naturata) と名づけんか、神は能産的自然なり。かくてスピノーザは極力人格的超越的な神を排斥せり。是れ実に「神即自然」 (Deus sive natura) てふ句もて言表はされたる、模範的ともいふべき彼の万有神教なり。」 (ほか同書、130, 131, 134)、児島 (1936 (1924 作)) 225-6: 「文藝復興期に於いては『自然』と『古代希臘美術』或は『古代美術』の両者は分つ可からざる相関的概念なりき。当時の美術家等が競つて古代美術の遺品を研究せるは即ち古代美術の遺品が能く彼等が以て美術の第一義と為したる自然研究の妙諦を示しつつありしがためなり。自然模倣の点に於て《alla antica》即ち《alla moderna》なりしを以てなり。蓋し彼等が宗とせしところの自然研究或は自然模倣とは単に自然の形容を模写するの謂にあらず其意の存するところは更に自然の内奥を探りて其理法を会得し Alberti の所謂 (concinnitas) に達し之によりて創作の自由を得るにあり。」
19. 例えば、Feuerbach (1841) 40-41、id.(1849) Abschnitt 1-2、Huxley (1889) 186-187、Ayer (1936) 152-3。
村上 (1998) は啓蒙期 civilization の概念の誕生に神の「抹殺」を見るが、社会契約論ほか (注 16 参照) 近代における三項図式の射影をなお見逃している (それは古代以来の西欧の自然観を二項関係において総括する姿勢に遠因があるかもしれない (村上 (1971) 306))。
20. 注 7、8 参照。稲村ら (1796) 『波留麻和解』は、「natuur 造化の神、神、萬物ヲ生ズル神」と、キリスト教創造論を少なくとも言葉の上で導入し、natuur を「神」との同義語としているけれども、吉雄ほか『道訳法児馬』所謂、『長崎ハルマ』は、「自然神学」la theologie naturelle とフランス語で訳すところの項 'De natuurlijke Godgeleerheid' については、「生ナカラニシテ知ラルル天ノ道」とする。また Halma(1729) 'Natuure, weezen.' の項において、フランス語で Nature, être. と記述され、第一の用例において 'De dodelijke natuur. La nature divine.' 「神の本性」を用例としているところ、吉雄ほ

かは、「nature, wezen 本体」と記述するにとどめている。そして次項 ‘De goddlyk natuur’ を「天ノ本体」と記述する。明治期においても上田敏（1901）「詩聖ダンテ」（『上田敏集 厨川白村集 阿部次郎集』（現代日本文学全集 4）改造社、1929: 5-93）は、ダンテ伝では科学者の先駆とすることを意図する記述はなさないにもかかわらず（「わかきダンテの学殖」（11-13）:11）、同時代の研究、L. Oscar Kuhns (1897), *The Treatment of Nature in Dante's 'Commedia Divina'*, London and New York. を翻訳によって研究の中核に据えるにあたり（「神曲の自然叙景法」34-43）、Kuhns 第1章におけるキリスト教協議に基づく三項図式としての「ダンテの自然概念」（‘Dante’s Concept of Nature’1-13）の章に触れることなく、続く第2章の技法（‘Dante’s Conventional Treatment of Nature’14-44）に限って翻訳し、Kuhns のダンテ近代科学者説による自然観察句を常套句から分離しダンテの自然観を引き出す方法論を顕揚する過程において、Kuhns に倣って、科学者の自然観察においては、ダンテは、ギリシャ・ローマ古典からと同等に、キリスト教教義からも、中立なるかの如き「自然」を、『神曲』において言及しているという解釈に、原語の個物観察対象（an object）に「自然」という総体を示す訳語を充てることにおいて関与している（「かの自然が直に迫り来【たっ】て」（35）（‘…those [memories] which come from the actual object referred to’ (Kuhns, *ibid.*,15)）。この点で、Kuhns と同等に、科学的「自然観察」と発話／書記言語を媒体とする対象描写とを混同する文学技法を提示することに関与している。しかし、ここで、上田敏は Kuhns 同様に、近代科学黎明期観察者の対象とする「自然」とは第二の聖書の判読として企てられていることを見落としている。ここにも三項図式が二項図式に短絡される歴史の些事を見出すことができる。

21. Giles (1892) における見出し、並びに、記述における「天」の使用参照。例えば、‘天 The material heavens; the sky; heaven; as a power unites with 地 to produce all living things; nature; the eternal principle of right; the Supreme Ruler of the universe; God, as an omnipotent, omniscient, and omnipresent being, beyond the ken of man; celestial; divine, in which sense it is applied to the Emperor, God’s vice-regent on earth. Natural, as opposed to 人 artificial. A day.’、‘太極公 personification of the Absolute, ---- Nature.’ (cf. s.v. ‘太極只是一個而無對者’ ‘---- the Absolute is simply one by itself without anything to compare it with.’)、‘大鈞 or 洪鈞 the great Maker, ---- God; Nature.’、‘天理 eternal principle; divine justice; natural sense of justice.’、(cf. ‘天主 the Lord of heaven; God.’ ‘老天爺 or 天帝 God.’)。
22. 柳父（1977）「『天』と natura」180-235。なお柳父はキリスト教三項図式もその教義も資料引用において各所で視野に入っているにも関わらず（e.g. 54-55）、日本的心性に視座を置くがゆえに主題化して問うことをしていない。今井（2005）は、キリスト教的視点から（esp. 106, contrast 柳父（1977）4-29）、村上陽一郎の術語「聖俗革命」をもって、西欧における三項図式から二項図式への遷移も（97, 99）、日本における『自然』概念の移入における超越的契機の喪失も（110）、指摘しているが、その内実は、柳父、伊藤らの先行挙証を越える必要がある。
23. 徳富蘆花（1900）（熊本バンドの一人）「自然の聲」69: 「…烏帽子が嶽の空鬱然として…雲むらむらと立ち渡りつ。何處ともなく襲かかる風雨の攻鼓とも云はむ雷の殷殷 [ごろごろ] と鳴り出で、…蕭然たる音山谷に起り、…／…国境の連山は、…惨として風雨の来襲を待つ状、ウオトルルーの英

陣も斯くと思はれて、沈鬱悲壯、跌宕なる自然の威力の森然として身に浸むを覚ゆ。」「春の悲哀」(67)：「野を歩み、霞める空を仰ぎ、草の香を聞き、緩やかなる流水の歌を聴き、撫づるが如き風に向ふが中に、忽ち堪え難きなつかしき感の起り来るあり。捉へんとすれば、已に痕なし。／吾靈其の離れて遠く来れる天の故郷を慕ふにあらざるなきを得むや。／自然は春に於てまさしく慈母なり。人は自然と融け合ひ、自然の懷に抱かれて、限りある人生を哀み、限りなき永遠を慕ふ。即ち慈母の懷に抱かれて、一種甘へる如き悲哀を感じずるなり。」、長谷川天溪(1906) 116：「古人の紀行文を見るに、何の神社とか、何宗の本山とかに到れば、必ず山川草木に神仏の威を認め、風雨鳥声に神の言葉、仏の説教あるを聞くなど録したれど、今人は如何に信心を起しても、…」。

24. 「海外単信 希臘聖山保護法」『東京朝日新聞』(昭和 13 年(1938 年) 12 月 10 日 朝刊 7)。元は、Muir (1896)、Mills (1917) などと考えられる。かれらの ‘nature’ の用例は、Muir (1894) 59: ‘No evangel among all the mountain plants speaks Nature's love more plainly than cassiope.’ (70): ‘Here are the roots of all the life of the valleys, and here more simply than elsewhere is the eternal flux of nature manifested. Ice changing to water, lakes to meadows, and mountains to plains. And while we thus contemplate Nature's methods of landscape creation, and, reading the records she has carved on the rocks, reconstruct, however imperfectly, the landscapes of the past, we also learn that as these we now behold have succeeded those of the preglacial age, so they in turn are withering and vanishing to be succeeded by others yet unborn.’、Mills (1917) 4: ‘It is a known fact, as is shown by pioneer people and the children of pioneers, that nature is a marvelous educational stimulus. If this be true, and it certainly is emphatically true, why not give the children of the country the opportunity to enjoy park life, and especially the national parks? In the national parks you will find some of the greatest wonders of the world, wonders not elsewhere to be found.’
25. 連合国軍最高司令部総司令部天然記念物課ウォルター・B・ボツファム大尉による「自然保護」政策進言(「自然美を損なうな／日本は観光国で生きよ」『朝日新聞』(昭和 21 年(1946 年) 9 月 17 日 朝刊 2)。
26. White Jr. (1967) 1205.
27. 青山(1994) 13-31, 165-185。ほかに、ガリレオにおけるアリストテレス自然学の超克は(例えば、Galilei, Galileo (1623), *Il Saggiatore*, Roma, pp. 196-197)、自然の目に基づく理論を否定することにあるとする(佐々木力『科学革命の歴史構造』2 巻、講談社、1995 年(初出：岩波書店、1985 年)、上 pp. 102-208)。このことは、「自然」の目では神の書いた第二の聖書を読めないという「自然」と信仰との二段階からなるキリスト教的教義図式に類比する。また、デカルトの意義については、Weber (1905) 27-28 を見よ。
28. The Larger Catechism of the Westminster Assembly (1641) Q1, ‘A. Man's chief and highest end is to glorify God, and fully to enjoy him forever.’ ‘An Introduction to This Tract’, *Philosophical Transactions*, 1 (1665) 2: ‘… those, addicted to and conversant in such matters [= philosophical matters], may be invited and encouraged to search, try, and find out new things, impart their knowledge to one another, and contribute what they can to the grand design of improving natural knowledge, and perfecting all philosophical arts and

sciences. All for the glory of God, the honour and advantage of these kingdoms, and universal good of mankind.' Boyle (1674) sect. 1, part 1: 'And here, Sir, let me freely confess to you, that I am apt to think, that if men were not wanting to God's glory, and their own satisfaction, there would be far more discoveries made, than are yet attained to, of the divine attributes. ... I shall add, that though it be true, that by reason of God's infinity, we cannot comprehend him, that is, have a full and adequate knowledge of him; yet, we may not only know very many things concerning him, but, which is more, may make an endless progress in that knowledge. ... The divine attributes are such fruitful themes, and so worthy of our admiration, that the whole fabrick of the universe, and all the phaenomena exhibited in it, are but imperfect expressions of God's wisdom, and some few of his other attributes.' Halley (1705) *Preface*: 'First, that the theories and discourses here collected, have already past the censure of the learned world: who have acknowledg'd them the most satisfactory accounts of nature's proceedings, wherein some of her greatest depths are fathom'd, and a foundation laid for posterity to build an infinite superstructure.' Alexander Mackay-Smith (1891) 17-18: '... when in those famous sixteenth and seventeenth centuries, a new world unfolded itself before men, it found prepared over against it, ... Nature conquers him by her sterility and iron-hardness. Or, put him too near the Tropics, and he conquers Nature, in his turn, so easily that he degenerates for lack of opposing forces on which to whet his keen strength; and Nature, in the end returns again to conquer him by her too abundant fertility, and by the insidious forces of the sun, which Deliah-like, sap his energies. ...' 徳富蘇峰 (1894) 『大日本膨張論』 50-51: 「嗟呼萬里の波濤を開拓するの壯心雄志、初めて酬ひんとするの緒に就きたるを見ずや。日本國民の解脱、復活、それ今日にあらずして何ぞ。三百年來収縮的日本が、一大飛躍して膨張的日本となるの機、這の一刹那にあらずして何ぞ。／之を己に取りては、日本國の開放解脱の爲め、之を他に取りては、世界に於ける頑迷主義に一大打撃を與へ、文明の恩光を、野蛮の社会に注射せんが爲め。」

【引用文献】

『暗厄利亜語林大成』(1814) (蘭和辞典を元にして作られたという最初の英和辞典)

青山昌文 (1994) 『比較思想・東西の自然観—地球環境破壊を超えて』 放送大学教育振興会

海老沢有道、H・チースリク、土井忠生、大塚光信編 (1970) 『キリシタン書 排耶書』 岩波書店

『大辭典』(1936) (復刻版, 平凡社, 1994)

『どちりいな - きりしたん』(ヴァチカン図書館蔵、1591 年版) (海老沢ほか (1970) 所収)

ハビアン (1565-1621?) 『妙貞問答』(海老沢ほか (1970) 所収)

長谷川天溪 (1906) 「幻滅時代の芸術」、千葉俊二、坪内祐三編 (2003) 『日本近代文学評論選 明治・大正篇』 岩波書店、112-124

波多野精一 (1901) 『哲学概論』 東京専門学校専門部

- (1949 (1901 初出)『西洋哲学史要』『波多野精一全集』第1巻, 岩波書店
- 飛田良文、李漢燮編 (2001) ヘボン著 (初版 (1867)『和英語林集成—初版・再版・三版対照総索引』, 3巻, 港の人
- 廣田憲寛 (1857)『増補改正譯鍵』
- 廣瀬元恭譯 (嘉永7年 (1854年))「総論」、『理学提要』第1巻
- 堀達之助 (1823-1894) 編 (1862)『英和对訳袖珍辞書』 開成所
- 井上俊 (1996)「序 日本文化の社会学」、『日本文化の社会学』(1996) (岩波講座 現代社会学 23) 岩波書店、1-6
- 今井尚生 (2005)「西欧近代の「自然」概念とその受容」、塩野和夫、今井尚生編 (2005)『神 (ゴッド) と近代日本—キリスト教の受容と変容』 九州大学出版会、93-112
- 稲村三伯、宇田川玄随、岡田甫説ら (1796)『波留麻和解』
- 伊藤俊太郎 (1985)「自然の概念」『比較文明』 東京大学出版会、135-146
- (1988) s.v.「自然」『世界大百科事典』 平凡社
- (1998) s.v.「自然」『岩波 哲学・思想事典』 岩波書店
- (1999)『自然』 三省堂
- 岩村透 (明治38年 (1905年))『西洋美術史要』 画報社
- 金田一春彦 [1913-2004]、池田弥三郎 [1914-1982] 編 (1988)『学研国語大辞典』 学習研究社
- 古賀十二郎著 長崎純心大学比較文化研究所編 (2000)『外来語集覧』 長崎外来語集覧刊行期成会
- 児島喜久雄 (1936 (1924 作))「GIGANTE MORENTE」『美術概論』 小山書店、225-238
- 小崎弘道 (1889)「神の存在」『信仰之理由』第4章、『小崎全集』第一巻、小崎全集刊行会 1938
- 久米邦武 (1878)『特命全権大使米欧回覧実記』第1編, 博文社
- 松村明 [1916-2001] (1988)『大辞林』 三省堂
- 同監修 (1995)『大辞泉』 小学館
- 三浦浄心 (茂正) (ca. 1615)「南海を埋め江戸町立て給ふ事」『慶長見聞集』(富山房 袖珍名著文庫 巻25) 巻7
- 諸橋轍次 (1988)『大漢和辞典』 修訂第2版 (初版, 1955-60) 大修館
- 村上陽一郎 (1971)『西欧近代科学—その自然観の歴史と構造』新曜社
- (1976)『近代科学と聖俗革命』新曜社
- (1998) s.v.「自然」(新カトリック大事典編纂委員会 (1998)『新カトリック大事典』研究社)『日本国語大辞典』第2版 (2001) 小学館
- 中村元 (2001)『広説仏教語大辞典』 東京書籍
- 落合直文 [1861-1903] (1904)『國語辞典』 大倉書店
- (1922)『改修 言泉』 大倉書店
- 「岡本太郎の巨視的な美」『東京新聞』2015年6月12日, 夕刊, 7
- 大鳥圭介 (1874年 (1879年出版))『石炭編』 開拓使

- 大槻文彦〔1847-1928〕著・発行（1889）『言海』
- （1956）『新編 大言海』 富山房
- 羅竹風〔1911-1996〕編（1986-1994）『漢語大詞典』
- 陸爾奎ほか編（1915）『辭源』
- 佐々木力（1995）『科学革命の歴史構造』2巻、講談社（初出：岩波書店、1985年）
- 新村出〔1876-1967〕『広辞苑』第6版（2008）
- 新村出、柊源一校注（1993）『吉支丹文学集』、第1巻（東洋文庫 567）、平凡社、
- 『新約全書』（1881）米国聖書
- 杉本良夫（1996）「日本文化という神話」、『日本文化の社会学』（1996）（岩波講座 現代社会学 23）
- 岩波書店、7-37
- 高橋五郎（1878）『漢英對照いろは辭典』 丸善
- 高楠順次郎（1866-1945）（1935）「東洋文化史における仏教の地位」『高楠順次郎全集』第1巻（1977）
- 教育新潮社（外務省文化事業部に於ける講演）
- 徳富蘆花（1900）『自然と人生』 民友社： 岩波文庫（1933）
- 徳富蘇峰（1894）『大日本膨張論』 民友社
- 上田敏（1901）「詩聖ダンテ」（『上田敏集 厨川白村集 阿部次郎集』（現代日本文学全集 4）改造社、
- 1929: 5-93）
- 上田萬年〔1867-1937〕、松井簡治〔1863-1945〕（1915）『大日本国語辞典』 富山房
- 宇井純（1972）「反大学における学問を求めて」『公害列島 70年代』 亜紀書房、6-7
- 和辻哲郎（1943（初版 1935））「モンスーン的風土の特殊形体」『風土』 岩波書店、121-169
- 約瑟奚般【Joseph Haven】著 西周訳（明治8年（1875年））『心理学』 明治書房
- 柳父章（1977）『翻訳の思想—「自然」と NATURE』 平凡社
- （1977）「辞書、事典に見る「自然」と nature」同書、31-50
- （1982）「自然」『翻訳語成立事情』 岩波書店、125-148
- 吉雄権之助ほか 原著者 François Halma, Hendrik Doeff 編『道訳法児馬』
- A Committee of Peking Missionaries, (1872) ,*The New Testament Translated into Mandarin*, American Missionary Press, Peking.
- Altieri, Ferdinando (1727), *Dizionario Italiano ed Inglese, Mr. Altieri's Dictionary*, t. 2, English and Italian, London.
- Augustinus, *De trinitate*.
- Averrois ---- *Aristotelis Stagiritae De Physico auditu libri octo, cum Averrois Cordubensis variis in eosdem commentariis*, Venetiis, 1550.
- Ayer, A. J. (1910-1989) (1936), *Language, Truth and Logic*, Penguin Books, 1971.
- Bird, Isabella L. (1888), *Unbeaten Tracks in Japan*, 3rd ed., London.
- (1894), *Among the Tibetans*, New York.

- Bonaventura ----Bonaventura, *Christus unus omnium magister*.
- *Collationes de donis spiritus sancti*.
- *Setentiarum librum III, Commentaria in quatuor libros Sententiarum magistri Petri Lombardi*, in: Bernardini, P. (1887), *Opera Omnia*, t. 3, Quaracchi.
- Boyle, Robert (1674), ‘The Excellency of Theology or The Pre-Eminence of the Study of Divinity above that of Natural Philosophy’, part 1, section 1, *The Excellency of Theology Compared with Natural Philosophy, The Works of Honourable Robert Boyle in Six Volumes*, vol. 4, 1772.
- (1685), *A Free Enquiry into the Vulgarly Receiv’d Notion of Nature Made in an Essay Address’d to a Friend*, by R. B., Fellow of the Royal Society, London.
- Bruckhardt, J. (1860), *Die Kultur der Renaissance in Italien*, Basel.
- Calvin, Jean (1559), *Institutio Christianae religionis*, Genevae.
- (1887), Cunitz, E, et al. (edd.), *Ioannis Calvini Opera quae supersunt omnia*, t. 32, Brunsvigae.
- Cobett’s Parliamentary History of England*, Vol 1, London, 1806.
- Collado, Didaco (1632), *Dictionarivm sive Thesavri Linguae Iaponicae Compendivm*, Romae.
- Companhia de Iesv (1603), *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, [Nangasaqui].
- Conversations Lexicon oder encyclopädisches handwörterbuch für gebildete Stände*, 6 Bände, Leipzig, 1815.
- Craigie, W.A. (1907), Murray, J.A.H., *A New English Dictionary*, Vol. 7, part 1.
- Dictionarivm Latino Lvsitanicvm, ac Iaponicvm ex Amrosiicale*. Amacvsa, 1595.
- Du Cange, Charles du Fresne (1688), *Glossarium ad scriptores mediae at infimae graecitatis*, t. 2, 1688.
- Glare, P.G.W. (2012), *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed., Oxford.
- Erasmus (1516), *Novum instrumeutum omne*, Basileae,
- Eriugena---- *Johannis Scoti Eriuganae De divisione naturae*, Ascendorfianae, 1838.
- Feuerbach, Ludvig Feuerbach, L. (1841), *Das Wesen des Christentums*, in: *Ludwig Feuerbach’s sämtliche Werke*, 7er Band, Leipzig, 1849.
- (1849), *Das Wesen der Religion*, Leipzig.
- Galilei, Galileo (1623), *Il Saggiatore*, Roma.
- Giles, Herbert A., *A Chinese-English Dictionary*, London, 1892.
- Halley, Edmond (1705), *Miscellanea curiosa: being a collection of some of the principal phaenomena in nature, accounted for by the greatest philosophers of this age, together with several discoveries read before the Royal Society, for the advancement of physical and mathematical knowledge*. [vol. 1] London.
- Halma, François (1653-1722) (1729), *Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen*, Utrecht.
- Hansard, <https://hansard.parliament.uk> (access: 2017.10.1).
- Haven, Joseph (1876), *Mental Philosophy*, Improved Edition, New York.
- Hobbes, Thomas (1651), *Leviathan or The Matter, Forme and Power of a Commonwealth Ecclesiasticall and Civil*, London.

- Huxley, H.T. (1889), 'Agnosticism', *The Nineteenth Century*, 15 (1889) 169-194.
- Philosophical Transactions*, 1 (1665): *Philosophical Transactions: Giving Some Accompt of the Present Undertakings, Studies, and Labours of the Ingenious in Many Considerable parts of the World*, Vol. 1, the Royal Society, 1665-1666, 1.
- Kuhns, L. Oscar (1897), *The Treatment of Nature in Dante's 'Commedia Divina'*, London and New York.
- The Larger Catechism of the Westminster Assembly (1641), in: *The Larger Catechism of the Westminster Assembly with Proofs from the Scriptures*, Philadelphia, 1841.
- Larousse, Pierre (1863), *Nouveau dictionnaire de la langue française*, 4ème ed., Paris.
- Liddell, H.G., and Scott, R. (1897), *A Greek English Lexicon*, 8th ed., Oxford.
- Liddell, H.G., Scott, R., and Jones, H.S. (1996), *A Greek English Lexicon*, with supplement, 9th ed., Oxford.
- Locke, John (1690), *Two Treatises of Government*, 1690.
- Petri Lombardi Novariensis Episcopi Parisiensis *Sententiarum libri quatuor*, Antverpiae, 1757.
- Luther, Martin (1520a), *Von den guten Werken*.
- (1520b), *Von der Freiheit eines Christenmenschen*.
- Mackay-Smith, Alexander (1891) Sermon, in: *Service at St. Bartholomew's Church, Sunday 22nd February 1891*, 15-29.
- Mill, J.S. (1850) 'Nature' in: id. (1885), *Nature, The Utility of Religion, and Theism*, 3rd ed., London, 3-65.
- Mills, Enos, (1917), *The National Parks for All the People and Perhaps Our Greatest National Park*, Washington.
- Muir, J. (1894), *The Mountains of California*, New York.
- Pagés, Léon (1868), *Dictionnaire Japonais Français*, traduit du *Dictionnaire Japonais-Portugais*, Nagasaki, 1603, Paris.
- Pseud-Zonarus [A.D. 13C], *Lexicon*.
- Rodriguez, Joan (1630), *Vocabulario de Iapon*, Manila.
- Rousseau, Jean-Jacques (1755), *Discours sur l'origine et les fondements de l' inégalité parmi les hommes*, Amsterdam.
- (1762), *Du Contrat Social ou Principes du droit politique*, Amsterdam.
- Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph von (1803), *Ideen zur Philosophie der Natur*, 1ste Teil, Landschut.
- Smith, Adam (1776), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, London.
- Spinoza, Baruch de (1670), *Tractatus theologico-politicus*, Hamburgi, 1670.
- Stephanus, Henricus [Henri Estienne, 1528-1599] (1572), *Thesaurus Graecae Linguae*, t. 8, 1865, Paris.
- Thomas Aquinas, *Summa Theologica*.
- *Expositio in Matthaeum, Catena aurea in quattuor evangelia*.
- Thomas à Kempis (1418), *Imitatio Christi*.
- Weber, Max, (1905) *Die protestantische Ethik und der „Geist“ des Kapitalismus*, *Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 21(1905), 1-110.

Webster, Noah (1864), *New Illustrated Edition of Dr. Webster's Unabridged Dictionary of All the Words in the English Language*, thoroughly revised and improved by Goodrich, C.A. and porter, N., London.

Man's Downfall in the Nature Destitute of Divinity: the Validity and Historical Background of the Statement-Type on the Binary Relation of Man and Nature

Akitsugu Taki

Abstract

The statement types on the binary relation of the terms expressed in Japanese as 自然 [shizen] and 人間 [ningen] or in European languages, e.g., in English as 'nature' and, traditionally, 'man' can possibly, despite that on reflection those types can hardly be systematically unequivocal in the terms' senses understood among the actual speakers and listeners or be based on the actual homogeneity of the members of the related social group, translate into those statements referred to the fundamental framework in which people understand themselves in the process of their collective decision making. This framework, however, is historically in Europe formed originally from the statement types with an additional term connoting divinity.